L3T/L3TK/L3TF

本科２期９月度

解答

Ｚ会東大進学教室

# 難関国公立大国語／難関大国語Ｔ
# 京大国語／難関大国語Ｔ（京大）
# 一橋大国語／難関大国語Ｔ（一橋大）

# 14章

## 【問題】（演習）

出典…『とはずがたり』〈巻四〉の一節　／　大阪大学　文学部　前期日程　99年

### 現代語訳

（私は）尾張の国の熱田の社（やしろ）に参拝した。*御垣（みかき）を拝んだとたんに、（この国は）亡き父大納言雅忠が治めていた国で、この神社には、（父が）自分の祈りのためということで、八月の御祭には、必ず神馬（じんめ）を献上する使者をお立てになったものだったが、（父の）最後の病気の折、神馬を奉納なさった際、*生絹（すずし）の衣服を一着添えて献上したのだが、萱津の宿というところで、突然この馬が死んでしまったのだった。（みな）驚いて、国府の役人の（持ち馬の）中から馬を探して、（なんとか）奉納したと聞いたのだが、（このときの父の祈りは）神が聞き入れてくださらない祈りだったのだ、と（あとで）ついつい思ってしまったことまで、（私は）様々なことを自然と思い出さずにいられなくて、しみじみとした寂しさも悲しさも晴らしようがない気がして、この（熱田の）お社にその夜は泊まった。

都を出立したのは、（陰暦）二月の二十日過ぎであったけれども、やはり慣れない道中なので、気ははやるが、行程ははかどらないで、（陰暦）三月の初めになった。夕方の月が美しい明るさに姿を現して、都の空も同じ眺めであろうと自然に思い出されて、今さらの（ように、亡くなった後深草院の）面影も目の前に浮かぶような気がするけれども、（社の）御垣の中の桜は、（私の気も知らずに）今日を盛りと咲きほこっているのも、誰のためにこんなに美しく咲いている梢なのであろうかとつい思われて、

春の色も……春の情景も、（晩春）三月の空になったここ鳴海潟では、あと何日かたてば花も散り終えて、（緑の）杉木立ばかりの季節となるだろう

（と、）神社の前にある杉の木に、札に書いて（奉納歌として）打ちつけさせておきました。祈願したいことがあったので、そ（の熱田神宮）に七日間参籠して、再び出発しましたので、鳴海の潮干潟をずうっと歩みながら、神社をふり返ると、霞の間からかすかに見えている朱色の神垣は神々（こうごう）しくて、昔のことを思って流す涙をこらえきれずに、

神はなほ……（熱田の）神さまは、変わらずに情をかけて（私をお守り）ください。たとえ昔*とすっかり変わってしまっ（て尼となっ）た取るに足りないこの身でありましても

〔訳注〕＊ 御垣――神社の石垣。

＊ 生絹――生（き）のままの練らない絹で織った布。

＊ 昔とすっかり変わって――「御注連縄（みしめなは）」…「神」の縁で用いられた枕詞。「引き」にかかる。「ひき違へたる憂き身」…「以前とはすっかり変わってしまったつらい我が身」。つまり、「つらい出家の身」ということ。

**解答**

**問1** 生前に、遙任国司として知行した領国という意味。〔23字〕

**問2** 毎年奉納していた馬がこの年急死したのは、自分の病気平癒を願う父の祈りを神は聞き届けてくれないということを暗示する、父の死の前兆だったのだということ。〔74字〕

**問3** 旅の行程がはかどらないということ。〔17字〕

**問4** 作者が眺めている桜は、作者自身の寂しく悲しい心中と比べてみるにつけても、一体誰に見せようとしてこれほど美しく映えて咲いているのかということ。〔70字〕

**問5** 「鳴海潟」の「鳴」に「やよひの空になる」の「成る」を掛け、「杉村」の「杉」に「花もすぎ」の「過ぎ」を掛けている。〔56字〕

**問6** 熱田の神さま、今までのように私をお守りくださいませ。たとえ昔とすっかり変わってしまった尼姿の、つらく取るに足りないこの身でありましても。〔68字〕

【問題】（自習）

出典…紫式部『紫式部日記』／津田塾大学　学芸学部（英文学科）98年

現代語訳

大晦日の夜、鬼やらいの行事はたいそう早く終わってしまったので、お歯黒をつけるなど、ちょっとしたお化粧なおしでもしようと（思っ）て、くつろいで座っていると、（同僚の女房である）弁の内侍さんが（私の局へ）やってきて、世間話をして、（そのあたりに）横たわっていらっしゃる。（同じく同僚の）内匠の蔵人さんは長押より一段床が下がったところに座り込んで、（私の身の回りの世話をする童女の）あてきさんが縫う仕立物の、（表地と裏地の）重ね方や（単衣の袖口の）ひねり方を教えるなど、熱心にしていたところ、中宮彰子さまのいらっしゃるところのほうで、（なにごとか）ひどく大騒ぎする（のが聞こえた）。（弁の）内侍さんを起こすのだが、（すっかり寝入っていて）すぐには起きてこない。人が泣き騒ぐ（ような）音が聞こえるので、ひどく胸騒ぎがして、何も考えられない。火事かと思うのだが、（どうも）そうではない。「内匠（の蔵人）さま、さあさあ」と、先頭に無理に立てて、「どうあれこうあれ、中宮さまが（帝の前から御退出になって）御自分のお部屋においであそばす（のが心配だから）、急いで参上して（御様子を）拝見しましょう」と、（弁の）内侍さんを荒々しく突き飛ばすようにして（やっと）起こして、（内匠の蔵人・弁の内侍・自分の）三人で（おそろしさに）ぶるぶる震えながら、足も地に着かない（ような気持ち）で（中宮さまのところへ）参上しようとしていたところ、（その途中の廊下で、長袴くらいのほかには）何も身につけない人が二人座り込んでいる。（よく見るとこれも同僚の）靫負さんと小兵部さんではないか。なんとこういう事情だったのか（、大晦日に宮中に泥棒が出るとは驚いた）と思うと、ますます気味が悪い。

御厨子所の（下役人の）人々も（帝のお食事を司るところなのでたいがい遅くまで人がいるのに、あいにく今日は大晦日だというので宮中から）みな退出し、中宮さまの召使いの男たちも（宮中警護の）滝口（の武士たち）も、鬼やらいがおわったらすぐにみな退出してしまっていた。手をたたいて（人を呼び）大声を上げるのだが、返事をする人もいない。（やっとのことで）御膳宿の老女（がたまたま残っていたの）を呼び出せたので、「殿上（の間）に兵部の丞という蔵人（がいらっしゃるはずだから）、呼んできて呼んできて」と、（普段ならそんな身分の低い人とは口もきかない地位を認められた自分なのに）恥も外聞もなく直接自分で命じたところ、（老女が）探したのだが、（その兵部の丞もすでに）退出した後だった。（こうだれもいないとは）情けなく堪えがたいことは限りない。（そうこ

うするうちにやっと）式部の丞資業さんが参上して、（そのあたりの）あちこちの燈火の油などを、（本来その仕事をするはずの下級役人である主殿司（とのもりつかさ）もいないので）ただ一人で継ぎ足しなさって歩き回る。（女房たちは）誰も彼もどうしてよいかわからず、（腰を抜かしたのか）向かい合ったまま座り込んでいる（ひと）もいる。（そのうちに御報告が届いて）帝から（中宮さまへお見舞いの）お使いなどがやってくる。ひどく恐ろしゅうございました。（ひとまず落ち着いて納戸に当たる）納殿にあるお召し物を（中宮さまのお取りはからいで）取り出させて、この（盗賊に着物を盗まれた）人々にくださる。（盗賊も翌日の）お正月の晴れ装束は盗んでいかなかったので、（翌日の儀式では靫負さんも小兵部さんも）何事もなかったような様子だったが、（前夜の情けなく座り込んで震えていた）はだか姿は忘れることができず、（盗難のことは）恐ろしいのだが、（今になると二人の様子は何となく滑稽だったとも思うがやはり）おかしいとも口には出さない。

**解答**

**問1** (1)＝私がくつろいで座っている

(2)＝内匠の蔵人・弁の内侍・作者自身

(3)＝靫負・小兵部

**問2** (a)＝なんとまあこういうことだったのか

(b)＝さきほどからの大騒ぎの原因は、大晦日の晩で人気も少なくなった宮中に盗賊が押し込んで、中宮に仕える女房の衣服を奪っていったことだったのかと、作者にわかったということ。〔82字・解答例〕

**解説**

**問1** (1) 「うちとく」は、現代語では二者が仲良くなることを言うが、本来は「（着物の帯がほどけたように）ゆったりとくつろぐ・リラックスする」ことをいう。

「ゐる」は（「立ち居振る舞い」などに見られるように）「立つ」の対義語で、現代語の「いる」よりも特定の行為・状態を表す気持ちが強い。「じっとしている・しずまって動かない」といった原義からさまざまに用いられ、人間の一時的な様子の描写なら

「坐る」の意味であることが多い。動詞連用形を受けると「ずっと～している」という意味の補助動詞的な用法もあるのだが、このニュアンスは古文ではむしろ《存続》の助動詞「たり・り」によって示されることが多く、傍線部にも「たり」が含まれるので、やはりこの「ゐる」は「坐る」の意味に取るべきだろう。

さらに文末は、右に見たとおり《存続》の表現で終わること。平安時代の「たり・り」は基本的に《存続》であり、《完了》で用いられることは稀である。

なお、傍線部は主語が省略されているので、答案中に補うことが望ましい。主体は作者であるが、日記文学の地の文であることを考慮して「私」とする。

(2) 傍線部以前に登場している人物は、順に「作者」「弁の内侍」「内匠の蔵人」「あてき」の四人である。「内侍」「内匠の君」はいずれも右の人物の呼び名の一部だけを呼んだもので、それぞれ右の内の二人と同一人物である。「あてき」とは、「長押の下」すなわち作者より一段床の低いところにいて、縫い物の仕立て方を成人女性である女房から教え込まれているところからして、行儀見習いをかねて宮中の雑用に従事する少女、いわゆる「女の童（めわらは）」であろうとわかる。とすれば、この少女は中宮に直接仕えるのではなく、居場所から見て作者が個人的に召し使う人物であろうと推測できる。

さてこの四人のうちの三人を答えるわけだが、何かとんでもなく不吉なことが起こっているらしい気味の悪いところへ行こうとしているだけなら、だれがはずれてもよい。決め手は、本文5行目の作者の言葉「ともかうも、宮下におはします、まづまゐりて見たてまつらん」である。女房ならともかく、作者の個人的な侍女に過ぎない童女が中宮に目通りを許されはしない。したがって「あてき」以外の三人を答えればよい。

(3) 「この人〳〵に」の前後を見ると「御衣・給ふ」という表現があることに気が付く。一般的に言って、古文で「着物をくださる」というのは「被（かづ）く」という動詞で表現されて、何かの褒美・引き出物を意味することが多い。これは古典常識として理解しておかなければならないことである。

しかし、この場面では、誉められるどころでなく、切実に衣類を必要としている人物がいることを読み落としてはならない。冒頭の「つごもり」は広く月末一般を指す言葉だが、その直後の「追儺」から「大晦日」の意味だと理解する。（「追儺」は現在の節分豆撒きにつながる行事だが、当時は年末の行事だったことも、古典常識の範疇である。）当然、寒い。こんな夜に盗賊に着物を盗まれて裸でいるのだから、そのままではいられない。したがって、この盗賊に着物を盗まれた二人にお召し物をくださったと考

える。

**問2** (a) 「かく」は《副詞》で「このように・そのように」などの意味。「なり」は副詞に続くのだから順当には《動詞》と見るところだが、副詞が準体言扱いとなると《断定の助動詞》の可能性もある。あわせて、動詞なら「こうなる」、助動詞なら「このようである」の意味になるので、文脈による判断が必要である。「けり」は、自分で目の当たりにしていることに使っているのだから、《伝承過去》ではなく《気づき・詠嘆》の用法と理解すべきである。

さて、文末に《気づき》が表現されていることも念頭に置いて、「なり」の品詞を考える。話の発端は年末年始の行事の合間のちょっとした休憩時間だったが、そこへ時ならぬ事情不明の騒ぎが持ち上がり、不安に思っていた作者が、裸で座り込む二人の見知った女性を見つけた場面での一言である。したがって、騒ぎの原因がわかったことによる表現だと考えれば、《断定の助動詞》と取って「なんとこういうわけだったのか」という驚きを込めた納得と理解するのが妥当である。（動詞だと取ると、「なんとこうなったのか」という意味になり、結果はともかく始まりの状態は知っていたことになってしまう。）

(b) 解答欄の大きさが示されているが、30字×3行程度が相応しい大きさなので、そのあたりを目安に答案を作る。

右に見たように、この表現はそれまでの作者の心中の不安・危惧が、原因がわかったので（一応は）決着した場面での言葉である。したがって、傍線部に含まれる「かく」という指示語の指示対象を具体化することと、「けり」という助動詞にこめられた作者の心的状態、すなわち《気づき》を答案に反映させることがポイントとなる。

作者にわかったことの中心は、もちろんその前に作者にわからず気にしていたことである。問題文中の「のゝしる（本文3行目）」「いとゆゝしく、ものもおぼえず（4行目）」などから、作者は騒ぎの原因が知りたかったのだとわかる。そしてそれが「はだかなる人ぞ二人ゐたる（6行目）」で決着するわけだ。問題は、その原因が直接的には言葉になっていないことだが、「冬場に騒ぎがあって行ってみたら裸で震えている人がいた」というのだから、これは常識的に「引き剝ぎ」であるとわかるはずだ。（この推測を阻むものがあるとすれば、「宮中に泥棒などが入れるはずがない」という思いこみしかあるまいが、実は平安時代は内裏がたびたび炎上するほど物騒で、また宮中で火事があるとしばらくは天皇も宮中を離れて母方の実家に身を寄せるという「里内裏」も珍しくない時代だったのである。）したがって、設問の「具体的に」という指示に応えるためには、答案中に「引き剝ぎ・盗賊・強盗・盗人・泥棒」あるいは「盗難」といった表現が不可欠である。これと「女房の着物が奪われた」ということが「騒ぎの原因」

だと「作者にわかった」という四点が、答案を構成する必須要素である。

あとは、字数のゆとりのある限り、前提条件としての経緯を説明してやればよい。「追儺が終わって宮中から人が出払っていた」ことを指摘すれば十分だろう。

●メモ●

# 15章

## 【問題】（演習）

出典…『古本説話集』／富山大学　前期日程　01年

### 現代語訳

今となっては昔のこと、大和の国に裕福な者がいたそうな。家には（広大な庭に）築山をもうけ、池を掘って（水を湛え）、趣深いことごとを残らず行っていた（ほどの分限者であった）。（その家に仕える者どものうちに、）門番の女の息子であった子で、真福田丸という（子が）いた。春（のある日）、（主人の庭の）池の近くに行って、芹を摘んでいたときに、例の富豪の大切にかわいがっている（ために普段はあまり表に出てこない）姫さまが、（庭に）出て遊んでいた（ところ）を見ると、容貌容姿が言葉にならない（ほどに美しい）。そ（の様子）を見て以来というもの、この男の子は、身のほど知らずな（恋の）気持ちがおこって、（叶うはずもない望みを抱いてしまったことを）ずっと悲しんでいたが、（文盲のため、手紙を書いて）これこれと（自分の気持ちを相手に）ほのめかすことのできる手段さえもない（し、まして相手が自分の気持ちに応えてくれることなどなおさらなさそうな）ので、とうとう病気になって、（周囲の者には）はっきりと理由もわからない様子で寝付いていたので、（真福田丸の）母は不審に思って、その（真福田丸が寝込んでしまった）理由を熱心に問い質したところ、男の子は、ありのままに（わけを）説明した。（息子の恋が成就するなどということは）まったくありうることではないので、自分の息子が（このまま病を重くするばかりで）死んでゆくであろうことを悲しむうちに、（真福田丸の）母も同様に病気になってしまった。

ちょうどそのころ、その家の侍女たちが、この（門番の）女の小屋〔＝門のわきの門番が寝泊まりするところ〕で世間話でもしようと（思っ）て、入って（様子を）見ると、（母と子と）二人の者が病んで寝込んでいる。不審に思って（侍女たちが母にわけを）訊ねると、門番女の言うには、「これといった病気ではありません。これこれのことがございますので、悲しく辛く思っていることから、親子で死にかけているのです」と答える。召使いたちは（大げさだと思って）笑って、（本邸にもどって）その事情を姫さまに話した

ところ、（姫は）気の毒そうにして、「（その子の恋煩いを消すのは）なんでもないことよ。はやく病気を治しなさい」と言っ（て、それを寝込んでいる二人に伝えさせ）たので、男の子も（母）親も恐縮して、（一方ではまた）喜んで、起きあがって、食べ物を口にしたりなどして、元どおりに（元気に）なった。

姫さまが言うには、「こっそりと手紙などやりとりしようとしても、（真福田丸は）字を書かないであろうことが、残念よ。読み書きをお稽古なさい」（と）。（それを聞いた）男の子は喜んで、一日か二日のあいだに（字を）すべて憶えてしまう。次に（姫が）言うには、「私の両親が亡くなるようなことも遠くありません。その後は、（この家のことは）なんでも（お前に）取り仕切らせるつもりですが、漢籍に慣れ親しんでいないのは、（この家全体の差配を任せるには）感心できません。漢籍もお読みなさい」（と）。男の子は、さらに学問に励んで、道理を明らかにするほど（の学識を備えるよう）になった。次に（姫が）言うには、「（私のところへ）こっそり通ってくるとしても、雑役（の身なりでは）、みっともないことです。お坊さまにおなりなさい」（と）。ただちに（真福田丸は法師に）なった。次に（姫が）言うには、「とくに理由もない僧侶が（私のような若い女性に）近づくようなことは、（はたから見ると）不審です。『般若）心経』や、『大般若（経）』などを諳誦しなさい。（私のために）祈禱をさせるようにして振る舞いましょう」と言うので、（真福田丸は姫が）言うとおりに（仏教の重要経典の学問まで修めて）諳誦した。次に（姫が）言うには、「やはり、もう少し修行なさい。（そしてみんなに認められるような偉いお坊さまになったら、私の）身を護るようにして（私に）近づいておいで」と言うので、（真福田丸はこれまでの修行に加えて）さらに修行に旅立つ（ことになった）。姫さまは感心して、（旅装束として）藤の袴を作って（真福田丸に）与える。（その袴の）片方の脚は、姫さまが自分の手で縫った（のだった）。それ〔＝大切な袴〕をはいて（真福田丸が）修行しつつあちらこちらをめぐっているうちに、この姫さまは、あっけなく病気になって死んでしまった。（それを知らない真福田丸は）先ほど述べたように（修行を）しながら（各地を）めぐって（ようやく人にも知られるほどの立派な修行者となって）、早く（姫に会いたい）と帰ってきたところ、「姫さまは亡くなってしまった」と聞くと、悲しいことはこの上もない。それ以来、（以前のように姫に会いたくて行う修行と異なり、本心から）仏道に帰依する気持ちが深く起こったので、あちらこちらと修行を続けながらめぐって、（後には）ありがたい上人さま（だと皆に尊敬されるようになったの）でいらっしゃった。法名は智光と申しあげた。（その智光上人も）とうとう入滅往生してしまった。

（上人が亡くなった）あとで（上人の）弟子たちが、菩提を弔う法事に、菩薩と呼ばれて民衆の尊崇を受けていた行基上人を（法事を司る）導師としてお招き申しあげたところ、（行基菩薩は）礼盤（らいばん）〔＝本尊正面の導師のための壇〕にのぼって、「真福田丸の藤袴、私

が縫った片袴」ととなえて、それ以外のこと（は一言）も言わずに（礼盤から）降りておしまいになった。（智光上人の）弟子たちは不思議に思って、（行基菩薩に理由を）お訊ね申しあげたところ、（行基菩薩は）「亡くなった智光は、きっと極楽往生を遂げるはずであった人だ。（ところが智光は）どうしたことか惑いの道に踏み迷ってしまったので、私が、迷った人を法に導く手段として、あのように（智光の気持ちが仏道に向くように）仕向けたのだ」とおっしゃった。

行基菩薩は、この智光を導くようなことのために、化身となって富豪の娘としてお生まれになったのだった。行基菩薩は文殊菩薩（の化身）である。真福田丸は智光上人の幼名である。ということは、この（話の）とおり、仏も菩薩も、（迷える衆生のためには人間の）男や女となってお導きになるのであることよ。

**解答**

**問1** 体の具合がわるいといったこともなさそうなのに息子が病気で寝込んでいる理由を母が息子に熱心に尋ねると

**問2** 門番の息子という分際で主人である富豪の娘に恋をしても、恋が成就するはずがないということ。〔44字・解答例〕

**問3** かくとだにほのめかすべき便りもなかりければ（4行目）

**問4** 富豪夫妻の死後は、跡取り娘である自分が真福田丸に家の要事の差配を任せるつもりだということ。〔45字・解答例〕

**問5** 真福田丸が人目に付かないように富豪の娘のところに恋人として通い続けること。〔37字・解答例〕

**問6** 仏道を修めて極楽往生するはずの真福田丸が、恋の煩悩に囚われて仏道を見失ってしまっていたということ。〔49字・解答例〕

**問7** 行基菩薩、この智光を導かんがために、仮に長者の娘と生れ給へる也けり。（24行目）

**問8**　姫君は、俗世の迷いに苦しむ真福田丸を仏道に導くために、菩薩の化身として現れた人だった。そこでまずは真福田丸に学問をさせ出家修行者として仏道を歩み出させた以上、さらに愛する者の死という試練を経験させて、真福田丸に真の発心を促すため。

〔115字・解答例〕

【問題】（自習）

出典…右大将道綱母『蜻蛉日記』「巻中　天禄二年六月」／埼玉大学　教育学部・経済学部　99年

現代語訳

そのようにして（日々を）過ごしているうちに、都のだれかれのところから（何通もの）手紙が届いた。読んでみると、「今日、兼家さまが（そちらへ）おいであそばす御予定だと、伺っています。今回までさえ（以前と同じようにあなたが山から）下らないとしたら、たいそう冷淡で人情味がないようにね、世間の人々も思うでしょうよ。同様に（兼家さまとしても）、もう二度と（あなたをお迎えには）いらっしゃいますまい。そんなことになるような後で（あなたが）下山なさったら、どんなにか世間の物笑い（の種）でしょう」と、だれもが同じことを書いているので、「おかしなことだわ、（それにしても）どうしたらいいことやら、（この山寺へ迎えに来るという夫も）今度はまったく（私を）ぐずぐずさせるはずもないだろうし（、有無を言わさず連れ戻そうとするに違いない）」と、胸騒ぎがしていると、私が（だれよりも）頼りにしている父が、任国からたったいま上京したなり、その足で（この山寺まで）やってきて、あれこれと（私を下山させようとなだめすかすように）言葉を尽くして、「実際、こうして（山寺に籠もったまま）もうしばらくは勤行をお続けなさいと（言おうと）思っていたが、この若君（の道綱どの）がずいぶんやつれておしまいになったことだ。（私にしてみれば娘であるおまえだけでなく孫の疲れを見るのもつらいことだ、）早く、やっぱり下山してしまいなさい。今日にでも（下山に日柄のよい）日ならば（私と）一緒に山を下りておしまい。今日でも（いいし、今日がだめなら）明日でも迎えに参上するから」などと、（私の下山はすでに）決まったことのように言われたので、ほんとうに気持ちの張りもなくなって途方に暮れてしまう。（父は）「それでは、やはり明日（迎えに来るよ）」と（言っ）て帰りなさった。

（心の支えと思う父にまで下山を勧められて、私は古歌にある）「*釣りをする漁師の浮き」とばかり（周りに翻弄されるように）気持ちが揺れて落ち着かずにいると、大げさに（先払い）しながらやって来た（人々がある）。あの人〔＝夫・兼家〕であるようだと思うと、（ますます）気持ちが乱れに乱れてしまう。今回は（前と違って）遠慮もせずに踏み込んで、（私のいる部屋の中に）ずいずいと入り込んでくるので、（私は）困って几帳だけを（なんとか）引き寄せてやっとのことで隠れ（ようとす）るのだが、（我が物顔の夫には）何の甲斐もない。（私が、仏前に供える）お香を盛りあげて置き、（手には）お数珠を提げ、（傍らには）お経を置いたりしている

のを見て、（夫は）「おお怖い、本当にこれほどまで（あなたが本気でお籠もりをしている）とは思わずにいたのだがね。まったくもって近寄りがたい様子でもいらっしゃるものだな。ひょっとして（寺から）出ようとしておいでになるかと思って（迎えに）参上したのだが、（そこまで熱心に勤行している人を寺から連れだしては、こりゃ）かえってばちが当たりそうに思えるね。どうだい大夫〔＝道綱〕よ、（おまえの母上が）こんなふうに（仏さま一途で今にも出家しそうに）ばかりいるのをどう思うかい」と訊ねると、（息子の道綱は）「どうにもつろうございますが、どういたしましょうか（、私にはどうしようもないのです）」と俯いてじっとしているので、（夫は）「いやはやかわいそうに（おまえも大変だな）」と（わざとらしく）呟いて、「それなら、なにはともあれおまえの気持ち（次第だ）。（母上が）きっと下山なさるのがよいはず（だと思う）なら（迎えの牛）車を（近くまで）来させなさい」と言い終わりもしないうちに、（息子は）立ち上がるや走り回って、（そのあたりに）散らばっている（私の身の回りの）ものなどをどしどし集めて、包みや袋に入れなければならないものは入れて、（それを召使いに渡して）車などに全部積み込ませ、（息子の指図を受けた召使いたちが、それまで）引き回してあった帷（とばり）なども取り外し、立ててあった（几帳や屏風のような）ものなどもわさわさと取りのけるので、（あれよあれよと見ている私の）気持ちは茫然として自分が誰だかもわからないような心地でいると、夫は（私のほうを）ちらちらと見つつ、（片付けの様子を）にこにこしながら（自分は動きもせず）見守っていたようだ。（ひととおり落ち着いてしまうと夫は）「この（片付けの）ことは、このとおり（済ませたの）だから、（今日こそあなたも）下山なさらなければならないようだね。仏さまに下山の事情を御報告申しあげなさい。おきまりの作法だよ」と（言っ）て、あとからあとから冗談を大声で飛ばしておられるようだが、（私のほうは）まさかにも口も利けず、涙ぐんでばかりだったものの、ぐっとこらえて思い直しているうちに、車を近寄せてからずいぶん時間が経ってしまう。（夫は寺に）午後四時ごろに来たのだが、（もう夕暮れの）火灯しごろになってしまった。（それでも私が）知らん顔で動かないので、（夫は）「いいよいいよ、私は（とっとと）出てしまおう。（あとは道綱、）おまえに任せるぞ」と（言っ）て出ていってしまうので、（息子も）「早く早く」と（私の）手を取って泣いてしまいそうなほどに言うので、（私もとうとう）仕方なさに（寺から）出て行く気持ちといったら、まったく（自分で）自分とも思えない。

（寺の南）大門から（車が）出ると（夫も）乗り込んできて、（都への）道中ずっと吹き出してしまいそうな（冗談めいた）ことなどを次々と言うが、（私にとっては今日の急展開に）夢心地のせいか何も言えない。この、（今まで）一緒にいた（私の）妹も「（日が）暮れたのだから構わないだろう」と（思っ）て、同じ車に（乗って）いるので、その（妹）がときどき（私の代わりに夫に）返事をしたりする。長い道のりを（都の我が家へ）帰り着くころには、申の時〔＝午後十時ごろ〕になってしまっていた。都（の家）では、昼

にそのような（夫の迎えの）ことがあると（私に）報せてくれていた人々が気を遣って、（召使いたちにも報せて）掃除をして、門も開けてあったので、（そのまま門内に入ったが、相変わらず私は）無我夢中のままで（車から）降りた。

気分もすぐれないので、（私は夫との間に）几帳を隔てて横になっているところへ、ここ〔＝この家〕に（留守を守って）いた侍女が、ひょっこり近づいてきて言うには、「撫子の種を採ろうといたしましたのですけれど、（すっかり枯れ果てて）根っこもなくなってしまいましたわ。呉竹も一本倒れましてございますの。手入れさせましたけれど……」などと報告する。「（そんなどうでもよいことなんか）今すぐ言わなくてもよさそうなことじゃないの」と思ったから、返事もしないでいると、眠ったかと思っていた夫が、まあほんとに耳敏く聞きつけて、さっきの同じ車で帰ってきた妹が衝立（ついたて）を隔てて（寝て）いるのに（向かって）、「お聞きになったかい、こっちでは大変なことがあるよ。（ほんの今日まで）この現世を捨てて家を出て悟りの境地を求めようとしていた人に、今も今しがたこ（の家）の侍女たちが言うのを聞いてみると、『撫子は撫でるように（大切に）育てたよ、呉竹は立てたよ』なんて言っているとはねえ」と話しかけると、聞いている妹も大笑いする。（私も）呆れるほど滑稽だったが、（笑い声を夫に聞かせるのも悔しいから）ほんのこれっぽっちも笑う様子は見せなかった。

〔訳注〕＊釣りをする漁師の浮き――「釣りする海人の泛子」…「伊勢の海に釣りする海人の泛子なれや心一つを定めかねつる」（『古今集』恋一・読人知らず）を本歌とする。

**解答**

問1　①＝(ウ)　②＝(イ)　③＝(エ)　④＝(ア)　問2　(イ)

問3　ⓐ＝(イ)　ⓑ＝(イ)　ⓒ＝(イ)　ⓓ＝(ウ)　問4　(オ)

問5　B＝母上が山寺を出ておいでになるのがきっとよいならば〔解答例〕
／母上が山寺をきっと出ておいでになりそうならば〔別解例〕
D＝自分が自分ではないような茫然自失の状態でいると〔解答例〕

／自分が誰だかわからないほど途方に暮れていると〔別解例〕

**問6**　あさましうをかしけれど、つゆばかり笑ふけしきも見せず（32～33行目）

**問7**　用意周到で強引かつ冗談好きで陽性の性格。〔20字・解答例〕

**解説**

**問1**　「物す」は、形式名詞「もの」にサ変動詞「す」が付いてできた動詞。「ある・いる・行く・来る」などの意味になることが比較的多いが、基本的には文脈に応じて様々な意味になりうる。それゆえ、ここでも前後の文脈を手がかりにして考えていく。

もっとも簡単な③から考えていこう。ここは1行目の「京のこれかれのもとより文どもあり」を踏まえて、「人々おなじことどもを物す」と「人々」の行為として語られている。「文（＝手紙）」に関することで、かつ人々の行為として相応しいものは、㈾「書いて寄こす」以外にはない。したがって、これが正解。

次は①と②だが、①には尊敬語「たまふ」が付いているのに、②には尊敬語がついていない点に注目したい。これは、①と②の主語が違うことを示している。では、それらの主語は誰か。同じカギカッコ内に「殿おはしますべきやうに」とあり、殿（＝兼家）に対して尊敬語が使われている以上、①の主語は兼家ということになる。反対に、尊敬語の付いていない②の主語は、同じくカギカッコ内の「下りずは」とあることをヒントにすると、山寺から下りる人（＝作者）と判定できる。そこで、選択肢を見てみると、兼家の行為として相応しいのは㈠「連れ戻す」と㈡「訪れる」の二つ。作者の行為として相応しいのは㈠「帰る」のみである。すると、この時点で、②は㈠しかありえないとわかる。

残った①だが、これは④もあわせて考えたい。ともに兼家の行為だが、①は山寺に行く前、④は山寺を訪れた後という違いがある。この点を念頭に置きながら、①を考えて見よう。文脈を手がかりにすると、ここは「今回までもあなたが山から下らないとしたら、たいそう冷淡だと世間の人々も思うだろう」という前文をうけて、「また兼家様ももう二度と～されないだろう」と続いている箇所である。ここだけ見ていると「連れ戻す」でも「訪れる」でも、どちらでもよさそうだが、④が兼家が山寺を訪れた後の動作であることを考えると、①には「訪れる」を入れる方がよい。つまり、①に㈡、④に㈠を入れるということである。

**問2**　問題を解くのは極めて簡単。「釣りする海人の泛子ばかり思ひみだるる（＝「釣りする海人の泛子」とばかりに思い乱れている）」とあるのだから、「釣りする海人の泛子」が示している心の状態は「思い乱れている」である。もう少し、ウキのイメージを大切にするなら、「気持ちが揺れ動いて落ち着かない」となろうか。ともかく、この「乱れている」という点を踏まえているのは、(イ)「決心がつかずにあちこち揺れ動く心の状態」以外にない。ということは、これが正解である。

ただし、受験生としては、この問題からもう少し一般的な古文の原則を引き出しておきたい。和歌の掛詞が典型なのだが、古文では自然と人事をダブらせて表現するというのは一般によくやる表現方法である。例えば、「秋が来て、草木が枯れてしまう」という自然叙述の裏に、「あの人の心に（私に対する）飽きが来て、あの人の足が私のところから離れてしまう」という人事に関する内容を潜ませるとか、「自然界の火は水をかけると消えてしまう」ということを前提にして、「私のあなたへの愛情（＝思ひ）は、涙（＝水）をどんなに流してみても消えることはない」と表現するなどという具合にである。それゆえ、受験生としては、このような《自然と人事の二重構造》について多少なりとも意識を向けておくべきであろう。

**問3**　「る」「らる」の識別は基本中の基本。基本的な着眼点は、「思ふ」「泣く」「忘る」など心の働きに関する動詞＋る・らるであれば《自発》、打消表現を伴っていれば《可能》、「～される」という意味があれば《受身》、主語が高貴な人あるいは尊敬語＋る・らるなら《尊敬》である。しっかりマスターしておこう。

まずⓐだが、「おこなふ」は仏道修行をするという意味で、心の働きに関する動詞ではない（またこの文脈で、自然に仏道修行をするなどの意味にもとれない）ので、《自発》ではない。また、打消表現を伴っていないので《可能》でもない。さらに、ここは「あなた（＝作者）が仏道修行をする」ということなので、「仏道修行される」という意味にもならない。つまり、《受身》にもならない。ということは、残った《尊敬》が正解。ここは、作者の父が作者に対して敬意を払っていると考えるのである。

次のⓑⓒも、同様に考える。この場合の「物す」は「帰る」意味なので、《自発》ではない。また、打消表現を伴っていない（この「ぬ」は完了）ので、《可能》でもない。また、「帰る」は自動詞なので「～される」という意味になりようがなく、したがって《受身》にもならない。つまり、ⓑも《尊敬》となるわけである。作者の父に対する敬意である。ⓒも、「いひののしる」は心の働きに関する動詞ではないので、《自発》ではない。打消表現を伴っていないので《可能》でもない。また、「猿楽言をいひののしる」

という意味なので、《受身》にもならない。したがって、ⓒも《尊敬》ということになる。兼家に対する敬意である。

残ったⓓだが、これは簡単。「ず」という打消の助動詞を伴っているので《可能》である。実は、中世になってくると肯定文中に《可能》の「る」「らる」が用いられる例が増えてくるが、この場合は、問題文に明記されているように『蜻蛉日記』であり、平安時代に書かれた作品であることが明らかなので、肯定文中の《可能》を考える必要はない。逆に言えば、作品が中世のもの（特に『徒然草』）である場合には、打消表現を伴っていなくても《可能》になることがあるので、注意しておこう。

**問4**　文脈を押さえてやれば容易に解ける。この段落は、作者の夫である兼家が山寺にやって来た場面である。最初の方は兼家と作者のやり取りであるが、「いかに大夫、かくてのみあるをばいかが思ふ」と兼家が息子の道綱に質問したことを契機として、道綱が場面に登場してくる。「いとくるしうはべれど～」というのは、道綱の返答。「あはれ」「さらばともかくもきんぢが心、出で給ひぬべくは車よせさせよ」は、その返答を受けての兼家の言葉である。そして、この「さらばともかくもきんぢが心、出で給ひぬべくは車よせさせよ」を受けての行動が傍線部Cであるのだから、当然この動作主体は兼家に「車よせさせよ」云々と言われた人物、すなわち道綱ということになる。

『蜻蛉日記』の注釈書には、これを兼家の動作とするものもあり、諸君の中にもそう解釈した人がいたかもしれないが（その場合、「さらばともかくも～」と言い終わらないうちにしびれをきらした兼家が言った事とは反対に自分で行動に出た、という解釈になる）、間違いである。続いて「人（＝兼家）は目をくはせつつ、いとよくゑみてまぼりゐたるべし」とあるように、兼家はそのような道綱の行動を見守っているからである。

このように、動作主体や主語の判定といっても、特別な解法があるわけではない。丁寧に文脈をたどることが一番の近道であると心得たい。

**問5**　B「出で給ひぬべくは」を品詞分解すると、「出で・給ひ・ぬ・べく・は」となる。この場合の「ぬ」は「ぬ＋推量の助動詞」の形になっているので《完了》ではなく、《確述》（＝強意）で理解する。これは、次に来る「推量の助動詞」の意味を強める用法である。諸君の中には「きっと～だろう」と訳すのだと思い込んでいる人もいるかもしれないが、「だろう」と訳すのは、「推量の助動詞」が文字通り《推量》の意味で用いられている場合であり、「推量の助動詞」の意味に応じて訳し方も微妙に異なる（例え

ば《意志》であるならば、「きっと～しよう」「必ず～しよう」などと訳す）。では、この場合の「べし」の意味は何であるか。「べし」の意味の識別は微妙なところがあり、綺麗にはいかないが、ここは出て行くか出て行かないかという比較選択の文脈と考えて《適当》と考えるのがよいだろう。「出ておいでになるのがきっとよい」ということである（あるいは、「きっと出ておいでになりそうである」としても可）。最後に「べくは」の訳だが、これは案外盲点になるところ。古文における仮定表現は、通常「未然形＋ば」で表すのだが、形容詞の場合には「連用形＋は」で表す。つまり、「恋しくは」で「もし恋しいならば」の意となるのである。したがって、問題の「べし」も形容詞型で活用するので、この「べくは」は仮定表現と判断する。

以上を合わせると、「出ておいでになるのがきっとよいならば」となる。これで逐語訳は完成。しかし、これで終わってはいけない。逐語訳ができたら、次は省略文節の補いや指示語の処理をする必要がある。この場合であれば、「出づ」の主語＝母上（筆者）及びどこからという要素＝山寺を補う。

**D**「我か人かにてあれば」のポイントは、「我か人か」という慣用表現。これは、「自他の区別がつかないほどの茫然自失の状態」という意味である。この点が明らかになっている答案なら、基本的にOK。同様の表現に「あれかのけしき・あれかのさま・あれかのようす」などがある。これらと一緒にまとめて覚えておこう。最後の「あれば」だが、通常「已然形＋ば」は《原因・理由》を表し、「～なので」と訳すが、この場合はそれではおかしい。筆者が茫然自失の状態でいることと、夫の兼家がちらちら作者の方を見ながら道綱が片付けている様子を見守っていることの間に因果関係はない。したがって、ここは《偶然条件》と理解して「～すると」と訳す。

**問6**　設問文を参考にすると、思っていることや感じていることとその行動が矛盾していることを表現した文だろうという見当がつく。そこで、「心情＋逆接表現＋行動」のようなパターンをした文を念頭におきながら、本文を探すことになる。すると、最後の一文「あさましうをかしけれど、つゆばかり笑ふけしきも見せず」が見つけられるだろう。「あさましうをかし」という心情＋「ど」（＝逆接の接続助詞）＋「つゆばかり笑ふけしきも見せず」という行動となっていて、文句なくこれが正解と判断できる。

**問7**　まず、二十字以内という字数制限に注目しよう。「兼家はどんな性格の人物か」などと聞かれると、それだけでびびってしまって、どうしてよいのかわからなくなる諸君も多いだろうが、所詮大学側が求めているのは「二十字以内」で書ける程度の性格でしかな

い。ということは、せいぜい二つくらいのポイントを指摘してやればよいということである。大学側の設定する字数制限は、決して諸君を苦しめるためのものではなく、解答を作るためのヒントでしかないと心得ておきたい。

そこで、二つくらいのポイントを拾うつもりで、本文を読んでいこう。まず気づくのが、筆者の意向をあまり考えないで強引に筆者を京に連れ戻す行動である。第二段落の前半から、そのような強引な性格が読み取れるだろう。これを一つ目のポイントとしよう。これ以外に何か拾えるところはないかと、さらに読み進めると、「天下の猿楽言をいひののしらる」（18～19行目）や帰京後の女房の言葉を聞きつけての発言が注目される。「猿楽言」は冗談ということだから、兼家は終始冗談を言い散らしていることになる。つまり、これらの叙述から、冗談好きという性格が導き出せるわけである。これが二つ目。

それゆえ、初めにも書いたように、二十字という字数制限からすれば、この「強引さ」と「冗談好き」を中心に答案をまとめることになる。その際の注意点であるが、このように複数の要素を答案に盛り込む場合、それらの要素がどのような関係にあるのかという点を常に明確にするように心がけよう（これは古文だけに限らない）。「AだからB」、「AだけれどもB」、「Aである以上B」、「AでありかつB」などという具合である。この場合は、「強引さ」と「冗談好き」の間には何の関係もないので、並列でならべて「強引でかつ冗談好きな性格」というふうにまとめる。「強引で冗談好きな性格」と書いてもよいじゃないか、と思うかもしれないが、そういう答案をいくら書いても読解力はつかないものである。

# 16章

## 【添削課題】

出典…津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究』／一橋大学　前期日程　00年

**文章略解**

「儒者の武」の根本概念は、文武両道を必要としながらも、あくまでも文による統治が基本で、武を用いるのはやむを得ぬ場合に限られるというものであった。この考えは、武を用いて勢力を得る戦国武士の存在とは相容れない。しかし、戦国武士の地位を継ぐ階級が中心となっているこの社会では、中国の士大夫のような、人の拠るべき仁義道徳の体現者として武士が位置づけられ、農工商の上位にあって敬意を集めることとなったのである。

**解答**

問1　①＝ウ　②＝ア　③＝ア　④＝ウ

問2　文によって人心を保つのが統治の基本であり、武力の行使は民の安全のためやむを得ぬ場合に限るという考え。〔50字・解答例〕

問3　さてこ～になる（23～24行目）

問4　武士は正義を全うするのがその職分である。

問5　武士が農工商の上位にあって尊敬されるのは、武士が人の道を示し、自己修行と民衆教化の職務を担っているからであるという

こと。〔60字・解答例〕

## 【問題】（自習）

出典…内村鑑三『代表的日本人』／オリジナル問題

**文章略解**

明治維新は西郷隆盛なくしては不可能であっただろう。確かに大久保や三条といった面々がいなければ、我々の今日有する「新帝国」は存在しなかったろうが、維新における出発合図者であり方向指示者であった西郷がいなければ、維新そのものが成功しなかったであろうからだ。講和の締結後は直ちに郷里の薩摩に戻った西郷であるが、数年後、首都に呼び出されて、他の維新の功臣と共に参議の重任に就いた。

## 解答

**問1** ①＝すぐ　②＝るたく　③＝よ　④＝お　⑤＝あがな

**問2** (a)＝端緒　(b)＝瀬　(c)＝看取

**問3** 西郷は当時進行中だった種々の社会的事件の進路を定める力を発揮したから。〔35字・解答例〕

**問4** A＝(イ)　C＝(エ)　**問5** (イ)　**問6** (オ)　**問7** (エ)　**問8** 戦争（27行目ほか）

**問9** 「天」の全能なる法則によりて命ぜられた方向〔21字〕（11～12行目）

**問10** 西郷隆盛は、幕府の長州征伐への加担を拒絶して薩長連合を組み、倒幕の戦いにおいては東海道軍を指揮し江戸城引き渡しに導いた。しかしその後は将軍とその家臣に対する大赦を主張して講和に導き、都を戦乱に巻き込むことを避けた。戦うべき時には戦

い、講和すべき時には講和するという彼の臨機応変な立ち回りによって、明治維新は安価に遂行された。このように、維新の方向付けをしたという意味において彼は不可欠の人物であった。〔200字・解答例〕

**解説**

**問1** ①については「傑出」「傑作」などの熟語を想起してもらいたい。②は「遠隔地に流されること」の意。③は「称」の旧字体。読みは前後の文脈から推測できたのではなかろうか。④・⑤は現在でも使われる訓読みである。

**問3** 同じ段落中の「余輩が西郷の名前を斯くの如く『新日本帝国』と密接に結びつける所以のものは……」（13～14行目）以下の部分に注目すれば、その「所以」＝「理由」が見出せよう。この部分を制限字数内にまとめればいい。「出発合図者」「方向指示者」は筆者独自の用語なので平たく言い換えてやる必要があろう。なお、（中略）の後の「倒幕運動に……」以下はみな「種種なる事件」の具体例である。これを解答に織り込もうとすると、字数制限に照らして苦労するだけで報われないので、着眼箇所にはくれぐれも注意したい。

**問4** Aについては、直前の「其の没落を、予期されたより遙かに早く」という表現から、急激な変化を表す(イ)が入る。Cについては、空欄に続く「一人の使者が……」以下の部分が「C たる態度」の具体例になっていることから判断をつけるのが正攻法。ただしこの設問の場合には、「態度」の形容となりうるものが(エ)（＝ゆったりと構えて物おじしないこと）と、(オ)（＝身を粉にして一生懸命に働くこと）の二つしかないことをまず押さえて、そのうえで筆者が西郷を「大将」と表現していることなどから考えて、それにふさわしい態度は、というふうに考えていっても解答は出る。

ちなみに、(ア)は「昔の人の詩文の意味を取り、文言を変えて自分の作として発表すること」、(ウ)は「内容をむりやりに自己の所論にこじつけること」の意味である。

**問5** 明治期文語文であっても、接続語の空欄補充の手続きは他の問題を解く際と基本的には同じである。ここでは、それぞれの選択肢の語を口語に置き換えてみればいい。(ア)は「こうして・このようにして」。(イ)は「しかし」（逆接）。要注意の接続詞が(ウ)。これは、

「そして」に近い添加の意味合いから「しかしながら」に近い逆接の意味合いまで、かなり守備範囲の広い接続詞である。口語でもっとも近い語を探すなら、カジュアルな話し言葉における「で、」に相当するものだ。したがって、埋めていく際の必然性（これを入れなければならないという事情）は他の語に比べて低い。この性質は、現代も使われている㈡の選択肢についても同様である。もとは「添加」の意味合いだが、この接続詞も守備範囲が広い。㈠は純粋に添加の接続詞。別の話をつけ加えるときに用いる。これは口語でも同じ。

で、文脈の方を見る（この「で、」が「而して」の語感である）。Bの前の文では「大権回復」→「将軍の二条城明渡し」という平和的な政権禅譲の様子が述べられているのに対して、後では「戦争は……始まった」とあるのだから、ここは明白に逆接であろう。

**問6**　「窘慼（きんせき）」とは、「深刻に思い煩うこと」。このニュアンスを忠実に反映している選択肢は㈠。しかしながら、この語の意味を知っている受験生などまずいないだろう。この種の設問で要求されているのは、その語自体を知らなくても見当をつけていく力である。

字面から見ていくと、「慼」の部首が「心」（したごころ）であるということから、心情にからむものであることが推測できよう。この時点で、具体的な行為を意味する㈢が落とせる。

あとは、文脈との関係における吟味である。ここでは、直後の勝海舟の科白と、それに続く西郷隆盛の応対が手がかりになろう。勝海舟が言った「今誠に君と……」の意味は、「今本当にお前と立場を交換しよう。そうでなければ、お前は私のことなど、よくわかることはできないのだ」ということ。それくらいに勝海舟は深刻に悩んでいたのだ。そして、それに対して西郷隆盛は「唖然として絶倒した」（41行目）とある。「唖然」とは「あんぐりと口を開けること」、「絶倒」とは、「抱腹絶倒」の四字熟語もあるとおり「笑いころげること」の意味である。このことを、筆者は「彼（＝西郷隆盛）は友人の困難を見て、興じてゐたのである！」としているのだ。したがって㈠の「決断」や㈡の「認識」では、それぞれ何を「決断」「認識」するのかに相当する部分が問題文中にないし、㈡の「困惑」（とまどうこと）という弱いニュアンスでないこともわかるだろう。よって、正解は㈠となる。

**問7**　これは漢字の知識の問題。傍線部分は、**問6**でも見当したとおり「かえん」と読んで「交換しよう」の意味である。したがって、「かえること・交換すること」の意味を持った選択肢を選んでいけばいい。㈠の「易」は「易学」の意味であり、㈡・㈢の「易」

は(ア)にちなんで「うらなうこと」の意味である。(エ)の「易」が「交換する」の意味である。英語の「トレード」が、「貿易」と「交換」の両方の意味を持つことを考えればこれは容易だろう。(オ)の「容易」の「易」は「い」と読む。ここでは「やさしいこと」の意味である。

**問8** これも**問6**同様、文脈から推測していけばいい。傍線部分より前に「彼の心は今や平和に傾いてゐた」(42行目)とあり、また傍線部分の後にも「平和を得なければならなかつた」とあるのだから、ここでの「干戈を交ふる」はその反対のことである。「戦争をしたら、何も罪のない一般の人々が苦しむことになる」というのがこの西郷の科白の真意である。ちなみに、「干戈」とは「ほこ、たて」の意。それを交えるのだから、やはり「戦争」である。

**問9** 同一表現を探していく、という手続きは現代文と同じである。ここでは、「方向」という語を探していけば範解箇所に到れる。あとは字数制限に合わせて抜き出すだけだ。この範解部分の表現も具体性を欠いてはいるが、設問の指示は「具体的に説明した箇所を」とはなっていないので別にこれでかまわない。解答する側で勝手に解釈しないことだ。

**問10** この設問は一橋大学の志望者のためにオプションとして用意した(明治期文語文を素材とした要約問題というのは他の大学では少ない)。したがって、これらの大学を志望している人は、実際に書いてみて適宜講義担当者などにアドバイスをもらうといいだろう。

内容的には、さほどの困難はないはずである。解答の軸とすべきは、「西郷隆盛は明治維新期の社会において進行中であった種々の事件の方向付けをしたという意味において不可欠の人物であった」ということ。これを、17行目からの二つの段落で述べられている具体例で肉付けしていけばいい。肉付けのポイントとしては、「我国の維新の此等の相反する両面」(31〜32行目)に鑑みて以下の二点をピックアップすればいいだろう。

Ⅰ　江戸城引渡しに際しては武力を用い、彼自身は東海道軍を指揮した。

Ⅱ　将軍とその家臣とには大赦を主張して講和に導き、都を戦争に巻き込むことを避けた。

前述の軸に沿って、この二点が押さえられていれば基本的にOK。要は、「戦うべき時は戦い、講和すべき時は講和する」とい

うことだ。これに木戸・大久保・三条・岩倉らとの対比を述べてもかまわないが、字数制限との兼ね合いでは避けた方が無難だろう。

L3T/L3TK/L3TF
難関国公立大国語／難関大国語Ｔ
京大国語／難関大国語Ｔ（京大）
一橋大国語／難関大国語Ｔ（一橋大）

Z-KAI

| 会員番号 | |
|---|---|

| 氏　名 | |
|---|---|

不許複製